大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

本田和子による〈子ども〉というコスモロジー

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): children as a different culture, cultural anthropological approach to children, developmental criticism 作成者: 吉田, 直哉 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017909

【論　　文】

本田和子による〈子ども〉というコスモロジー

吉　田　直　哉
大阪公立大学大学院現代システム科学研究科

要　　旨

本論文は、本田和子が1980年代から展開した子ども論に焦点を当て、そのコスモロジーとしての性格を明らかにすることを試みるものである。

本田によれば、中間者・境界者・媒介者としての子どもの行動は、無定形性・無方向性を特色とする。子どもの有する「侵犯性」というのは、安定的な秩序としての文化体系に対する挑戦である。子どもの「侵犯性」によって、大人の依拠する秩序の恣意性と硬直性が明らかになる。

本田によれば、子どもたちの「挑発性」は、流動的であること、変容的であることにおいて現れる。そして、流動性、変容性は共に、文化の体系性の対極をなす性質である。子どもたちは既存の文化に対して「挑発」する。反体系性、非統一性の現れとしての子どもは、その断片性、瞬間性、断絶性によって特徴づけられる。子どもは、反体系性、非統一性としての「異文化」を表象しているのである。

キーワード：異文化としての子ども、発達批判、子どもへの文化人類学的アプローチ

はじめに：コスモロジーとしての〈子ども〉の領野の開拓

本稿は、児童学者・本田和子（ますこ）が1980年ごろから展開した子ども論に着目し、そのコスモロジー（宇宙論）的特質に焦点を当て、その思想的射程を明らかにすることを試みるものである。本論に先立って、本田の略歴を記しておく。本田は1931年に新潟県に生まれ、1954年お茶の水女子大学家政学部を卒業、同大家政学専攻科を修了した。1957年より尚絅女学院短期大学講師を務め、その後十文字学園女子短期大学助教授を経て、1970年よりお茶の水女子大学家政学部助教授（1983年同教授）、1995年より聖学院大学人文学部教授を務めたのち、2001年よりお茶の水女子大学学長（2005年退任）を務めた。2022年現在、日本保育学会名誉会員である。

本稿にいう「コスモロジー cosmology」とは、宇宙の生成と構造、その変容に関する物語の謂である。「美しく配置された秩序」という原義を有したコスモスの語が、ピュタゴラスによって調和と均斉の美を内化した宇宙的秩序を表す語として転用された結果、コスモロジーは「万物がある秩序の下に美しく調和しており、それぞれがそれ自体、独立し完結した意味空間としての「小宇宙」であると同時に、より大きな「宇宙」を構成している」という発想に立つ「視角（パースペクティヴ）」だと捉えられるに至った（鵜野 1998：４）。

中村雄二郎は、コスモロジーを、時空間を「無性格で均質的な拡がりとしてではなくて、一つ一つが有機的な秩序をもち、意味をもった領界と見なす立場」だとしている（中村 1992：133）。近代科学の前提となった普遍主義的世界観とは異なり、「個々の場合や場所（トポス）」、「さまざまの具体的な場所や空間」のうちに見る視座である。このような中村におけるコスモロジーは、「人が、制度的な規定・定義を超えて、感覚をも動員して、何ごとかを理解するレヴェル」において、「イメージが呼応し合う」ことによって生成する宇宙像を

「象徴的宇宙」と呼んだ山口昌男の発想に類似している（山口 1975：201）。

1980年代以降の日本における言説空間において、コスモロジーは、個別性・具体性・一回性・臨場性の重視と、極大と極小の相同性を重視するマクロ・コスモス＝ミクロ・コスモスの照応という二つの要素を、その特質として有していた。このようなコスモロジー論の視座から、子ども論の展開が同時進行的に見られるようになる。前述の山口昌男や中村雄二郎ら、日本における現代思想の牽引者と交流しつつ（山口ほか 1984）、1980年代初頭に子どもにおける／子どもをめぐるコスモロジーの領野を開拓したのが本田である。

本田による子どものコスモロジーは、世界における〈子ども〉の生き方・ふるまい方についての言説（存在論）であると同時に、世界を〈子ども〉が把握する方法についての言説（認識論）でもあるという重層的な意味を有している。

〈コスモロジー〉として子どもを記述するといった場合、二つの含意があるだろう。第一は、〈子どもが生きるコスモロジー〉である。そこでは、子どもが生きる世界を、子どもを含めて、どのようなレトリックにおいて描きとるかに焦点があてられる。それは、子どもを含めた世界像としての叙述がなされるであろう（この場合、世界を織りなす主体としての子どもも、世界の一部として記述される）。つまり、コスモロジーの記述者は、子どもが生きる宇宙からは相対的に距離を有した視座に立つことが要請される。

第二には、〈子どもにとってのコスモロジー〉である。この場合のコスモロジーは、子どもの内面世界、子どもにとっての世界観、世界認識に対する接近として展開される。このコスモロジーは、子どもによって、世界はどのように生きられているかという、子どもを起点とした世界記述となるため、コスモロジーの記述者は〈子ども〉に自らの視座を仮託することになるであろう。

子どもをめぐるコスモロジーの概念整理を試みた前述の鵜野祐介によれば、日本における子どものコスモロジーにおいては、本稿における〈子どもが生きるコスモロジー〉・〈子どもにとってのコスモロジー〉という二つの言説はむしろ併存しているという（鵜野 1998）。そして、この二つの意味におけるコスモロジーは、必ずしも分離しているわけではなく、両者の相互浸透ないし相同性を強調する立論もありうると鵜野は指摘する。

鵜野によれば、本田は、子どものコスモロジーを、「外と内」の両面、すなわち「見える姿」と「心の姿」の両面から捉えること、「現実的、日常的時空間」と「遊戯的、非日常的時空間」の「同時的二重把握」への接近を試みた。後者の「遊戯的、日常的空間」を、いわば「深みの次元」「超越の次元」として導入することによって、本田は、子どものコスモロジーを「垂直軸を持つ立体的、重層的な構造体」として描き出そうとしているという。本稿も、鵜野と同様に、本田の子どものコスモロジーを、内面と外面の相互浸透という特徴を有する論として捉え、それに着目しながら読み解くことを試みたい。

本田は、自らの子ども論的探究の原点に、近代的な子ども観に対する問いなおしというモチーフがあったと述べている（本田 1982：12）。彼女のアプローチは、近代的な価値観の反映としての子ども観を相対化し、子どもと大人との連続性を切断したのちに現れてくる子どもの像を見据えようとするものである。本田のみるところ、近代的子ども観の槓桿をなしているのは、「発達」という尺度である。「科学的児童研究」に依拠した「可能性」「発達」という隠喩による子ども観は、近代において成立したものである（本田 1982：12）。「発達」は「適応」と同義にとらえられ、「可能性」は「秩序を到達点とする道すじの、どの段階にいて、どれだけの適応能力を獲得しているか」を指標として「有限化」される（本田 1982：17）。

「発達」の相のもとに子どもを見ると、子どもは大人に至るまでの道程の中途にいる存在であり、不完全な大人として現れることになる。近代以降、子どもは、「未分化、未成熟で、未だ社会化されない存在」として、「多くの「未」の字を冠されつつ云々される対象となった」（本田 1980：３）のは、未だ大人になり切れていない存在として子どもを位置づけたために生じたからである。すなわち、子どもを大人未満の存在と位置づけ

ることによって、「子どもを、将来に対する「可能態」、同時に、現在における「欠如態」と措定した」（本田 1980：３）わけである。

本田は、子どもを「近代的児童研究の所産である「発達観」や、その現世的な落とし子である「教育的、あるいは教育心理学的」諸配慮の外に身を置いて」見ようとする（本田 1980：６）。そのようなアプローチは、「「子ども」と「大人」とを、「発達」という勾配関係から解き放ち、相対する二つの極と位置づけて、それぞれの個性を把握し直すこと」（本田 1980：５）に繋がるだろう。子どもと大人を、「勾配関係」、つまり大人になり得ている程度に応じて子どもを位置づけるのではなく、本田は、子どもと大人を、対等な対立項として方法論的に位置づけ、あえて両者の「差異」に着目することによって、大人へと収斂していくスペクトラムの中から子どもを脱出させようと試みているのである。本田が「「差異性」を梃子にして、「子ども」と「大人」の直線系列を解体し、「子どもの世界・子どもの文化」をいいたてよう」とするのは、そのための方法であるという（本田 1980：５）。大人と子どもの間にあるのが「勾配」ではなく「差異」であるとするなら、大人に適用される視点をもって子どもを捉えようとしても、捉えそこねてしまうことになるだろう。つまり、子どもを捉える特定のまなざしが要請されることになるはずなのである。

子どもを、〈大人の文化〉とは異質な〈子どもの文化〉を生きる主体として位置づけることは、子どもと大人の差異性に着目することで、大人の側の論理、世界観に子どもを同質化すること、同化することを自制しようとする態度の表明である。本田は言う。「「子どもの異文化視」は、人間集団の多様性を水平に分散させたまま認識する装置であり、一方、棲み分けと共存を模索することにより、通文化圏の拡大に機能する実践装置ともなり得るだろう」（本田 1989：244）。本田がとりわけ、「子ども」という言葉を用いて、「六、七歳くらいまでの幼い人たち」――いわゆる「幼児」――に焦点化しようとするのも、幼児においてこそ、大人との「差異性」が際立つためである（本田 1980：７）。その「差異性」を、本田は、子どもたちの「行為」の中に見出そうとする。本田は言う。「子どもたちの行為が、私どもの眼に「ちがい」として映じるのは、それが、私ども大人の生の現象の中に出現しにくく、私どもの秩序の体系の外に位置することのゆえであろう。したがって、それらの「ちがい」は、しばしば、大人の合理主義的なまなざしによって「理解し難い奇妙さ」としてとらえられ、果ては、「たまたま」生じた「無意味なできごと」として葬り去られがちである。しかし、それらが、私どもの意表をつく驚きとして現れるからこそ挑発性を持つのだし、そのゆえに、無視し去ってはならないだろう」（本田 1980：６f.）。

１．問題構制としての「異文化としての子ども」

本田の子どものコスモロジーへのアプローチが言論界で注目を集める契機となったのは、1982年の『異文化としての子ども』の公刊であった。同書が賛否両論を巻き起こす中で生じた本田への批判としては、彼女の「異文化」というワードに引きずられて、「子どもは異文化か否か」という問題設定として提示されたものが多かったように思われる。その一方で、彼女が提起しようとしたものが、「子どもを異文化として見ようとしたとき、何が見えてくるか」、逆に「今まで何を見失ってきたのか」を反省的に問いなおす方法論的視座であったことについての検討は、相対的に希少なものにとどまったように思われる。つまり、本田の子どもへのアプローチの方法論的概念であった「異文化」を、実体的にとらえたことから生じる批判が複数見られた。高橋（2010）はその例であろう。高橋は、1980年代に活発化した、子どもの「存在そのもの」を問おうとする「子ども論」の代表的論者として本田を挙げ、「異文化としての子ども」という本田のアプローチが、「発達」という科学的・合理的な子どもへのまなざしを一時停止させたうえで、子どもの「非合理的な側面に真摯な態度で向き合い、かれらを「わからない存在」として、またそうしたかれらとの対面をいわば「異文化」としての出

会いとして捉えようとするもの」だとしている（高橋 2010：138）。高橋によれば、本田のアプローチは、「子どもたちの「わからなさ」を「他者性」に読みかえ、かれらを大人社会の「文化的他者」とすることにより、子どもの世界には大人の世界とは異なった独自の意味があること」を承認するための視点を提供しようとするものであった（高橋 2010：139）。しかしながら同時に、「異文化としての子ども」というアプローチは、「子どもと大人のあいだにはどれだけの差異があるのかを新たに掘り起こす作業」とならざるをえず、両者の間の「絶対的な差異」を認めることになってしまうという（高橋 2010：143）。

小浜（1987）も、子どもという「異文化」を、「人類学」における「未開人」とアナロジカルに捉え、子どもが「文化の外にある者」としてしか位置づけられていないことを批判している（小浜 1987：70）。小浜にとって子どもは、「生まれたときから大人との関係において秩序性の方向に強力に組みこまれている」存在であり、「もっと私たちに身近な、方法的に了解可能な存在」である。しかし、本田は、大人と子どもの通約可能性を全否定し、両者の間に「誇張された断絶」を持ち込んでいるというのである（小浜 1987：72）。

ただ、本田は、小浜が指摘するように子どもを異文化、つまり異質なるエスニシティとして実体的にとらえていたのではない。子どもを異文化として見ようとしたとき、子どものいかなる側面が可視化されるか、前面化するかという問題化の方法として、文化人類学に依拠したにすぎない。例えば、首藤（2011）は、子どもを「異文化」として見る手法は、「「象徴としての子ども」によっておおわれていた深層」を暴き出し、「消滅しかけていたもの」を奪取する「異化効果」を有するものとして捉えているが、「効果」に着目した方法論的立場の表明が「異文化」として見るまなざしの提起であったとみた方がよいであろう。

石井（1986）も、本田の子ども論における業績の核心を「異化」にあるとする。石井のいう異化とは、非日常化、非親和化の作用であり、ロシア・フォルマリズムの中で提起された概念である。本田は、「大人である私の「内なる異文化」を活性化しようとする戦略」として異化を実践しようとしていると述べ、「異文化」へのまなざしが、外部における「子ども」に留まらず、大人自身への内省として、大人に内在する「子ども」へも差し向けられていることを指摘する（石井 1986：18）。そのうえで石井は、本田が「子ども／大人」という二項対立（二分法）を反復して強調しているにすぎないとしている（石井 1986：18）。

ところが、本田自身が明確に述べているように、彼女の「異文化」アプローチは、「大人／子ども」という対立する二項の異質性のみを指摘して、両者の断絶を強調しようとするものではない。「もはや「子ども」ではあり得ない」存在としての大人と、子どもは、「具体的な日常を共に生きつつ、相互に交流可能なコミュニケーションを時々刻々開発し続けるだろう。この場合の両者は、対関係を形成する二つの極として相対峙しながら、関係の変容を共ににない合う。ということは、両者ともに、時々刻々の変容を経験し続けるということだ。そして、これが、実践のレベルでの通文化圏の拡大に他ならない。対象化し切るのではなく、さりとて同化し切るのでもない、お互いがお互いとしてありながら共有地を切り開いていく」（本田 1989：240）。つまり、本田のモチーフの基底には、「「子ども」との差異に敏くありつつ、彼らとの共通性を探る」（本田 1989：240）という、子どもへの両義的な向き合い方への模索があった。そして、子どもへのアプローチが両義的であるということは、子どもに向きあう〈大人〉の側に内在する両義性への自覚をもたらしうるものだと本田は考える。「子どもを異文化視し、その他者性に注目することで、子どもとの間に新たな視座を確立しようと願った」のと同時に、「私自身の「内なる異文化」を活性化したかった」（本田 1983：13）とも彼女は言う。つまり、本田にとっての異文化とは、眼前の・外在的な異文化の相と、自己の内面における内在的な異文化の相の両面において捉えられる両義性を特色とする。「外在する子どもの発見は、内なる子どもの覚醒と不可分であり、子どもの異文化性の解読は、内なる異文化との協応関係の上に成立する」（本田 1983：13f.）。すなわち、異文化への接近は、大人自身の内面に対する省察でもあるとされている点は強調されなければならない。

本田によれば、内的／外的な異文化は、「挑発性」を有する。というより、「挑発性」を見いだそうとするまなざしこそが、その先に異文化を見いだしうるとした方が適切かもしれない。「「文化の外なる存在」からの問いかけが、私どもを挑発するのだし、私どもの身体が思いがけずそれに応えてしまったとき、その「内なる異文化」の唆しによって私ども自身が挑発者のまなざしを持たされるのである」（本田 1982：２）。本田が、子どもの世界をつねに内的／外的側面の相互浸透と交絡に着眼しながら描き出そうとしているのも、「異文化」性が、内面と外面を相互浸透しあう不可分なダイナミクスを有していると捉えているからである。

本田は、子どもたちの「生存の様態を、「子どもの世界、あるいは文化」と呼び、それを「外と内」の両面、すなわち、「見える姿」と「心の世界」の両層において把握し、それらから、私ども大人に対して送られるメッセージを受け取ろう」という試みを遂行しようとする（本田 1980：７）。その試みは、具体的には、「見えるもの」としての「身体によって表現される「動き」」、「活動性」へと注目することによって開始される（本田 1980：８）。しかし、その「動き」が、単なる外的行為に留まるものだとは彼女は考えていない。

ただ、外的／内的な異文化へのアプローチが方法論として選択されなければならないのは、異文化性の現れが、必ずしも明瞭なものではないからである。むしろ、挑発性は、微細な現れ方をするのであり、その現れを見て取る視力、聴き取る聴力は、鋭敏なものでなければならない。「幼い人たちの言動は、しばしばその何気ない装いのかげに、いま一つ得体の知れない意味を秘めて、大人たちの無意識に囁きかけ、それを脅かす」（本田 1982：34）。しかしながら、現れの微細さは、異文化の有するポテンシャルの小ささを意味しない。「最も挑発的なのは、子どもたちの示す些細な言動」であり、私たち大人が依拠する「秩序体系そのものに投げかけられた問いである」という（本田 1982：12）。

いなむしろ、本田が見て取ろうとする子どもは、外部／内部という区分をすら無効化してしまうような存在なのかもしれない。本田は問いかける。「幼い人たちは、限りなく外部に近い内部、あるいは、根底的には内部的な外部……。空間的には境界性（マージナリティ）、時間的要因を導入するなら、過渡性（リミナリティ）と呼ぶことも可能だろうか」（本田 1991：274）。子どもたちは、境界的に存在する。両極に引き裂かれつつ、両者を媒介する、中間的な存在として生きる。子どもはつねに、「異界からの呼びかけに耳を澄まし、その誘いに両手を差し延べているように見える」（本田 1989：46）。

中間者・境界者・媒介者としての子どもの振る舞い、現れは、無定形性・無方向性を特色とするという。「子どもは、そのおのずからなる活力のままに、ばらばらと無方向に溢れ出して流動する存在である。こうした彼らのありようが、それだけで、人々を脅かし、正体不明の不安に陥れるとすれば、それは、彼らの存在自体がおのずから侵犯性を持つことの証である」（本田 1982：12）。ここでいわれる「侵犯性」というのは、安定的な秩序、およびそれを基盤とする文化体系に対する反逆性である。子どもの「侵犯性」によって、自分たちの依拠する「秩序が、流動し溢れ出るものを切断し停止させて、非連続に範疇化し、それを操作することで成り立っている」という現状が否応なく意識化されるというのである（本田 1982：19）。つまり、子どもの「侵犯性」は、秩序の恣意性を暴露することによって、既存の秩序が本質的なものであると見なす価値観を転覆させるポテンシャルを有している。

つまり、子どもが現しているのは、静的にたいする動的、秩序に対する無秩序、一義性に対する多義性である。そして、それらの現れによって子どもは、秩序あるいは体系としての大人の文化に対する異議申し立てを不断に提起しているのである。「子どもらとの間に結ばれる身体を介しての関係が、多義的でありすぎ、動的でありすぎて、意味の体系に位置づきにくいとすれば、それこそ、強力に築き上げられた「体系」なるものに対しての、ささやかな異議申し立てといえるのではないか。子どもたちの無秩序な蠢動と、それに対する身体のレベルの密かな応答、それらは、曖昧さを排除しようとする文化の体系に向けて、無数の問いを発し続けて

いる」（本田 1982：12）。

子どもたちの「挑発性」は、流動的であること、変容的であることにおいて現れる。そして、流動性、変容性は共に、文化の体系性の対極をなす性質である。「断えず溢れ出し、形を変えて、文化の体系に組みこまれることを拒む」有様において、子どもたちは「挑発的」である（本田 1982：２）。反体系性、非統一性の現れとしての子どもは、その断片性、瞬間性、断絶性によって特徴づけられるだろう。子どもの断片性は、一貫した意味を無効化する振る舞いによって現れる。そこでは、意味の連続性を支えるものとしての時間の連続性も無化される。子どもが見せるのは、「辻褄の有った物語にされることを拒み、さながら、その不統一性、意味不明性にこそ真骨頂がある」ともいうべき振る舞いであり（本田 1982：47）、意味の一貫性を拒否する「ばらばら」さである（本田 1982：47）。つまり、子どもにおいては意味の一貫性は不要で、時間は寸断されていく。子どもにとって、意味の断片性は、時間の断片性と重なり合う。フラグメントとしての意味空間と、フラグメントとしての時空間は、重なり合いながら、意味から強度へという志向を露にしているかのようである。

本田は、子どもの在り方の非統一性について、次のように述べている（本田 1982：54）。

> 子どもとは、統一されることなく、常にばらばらなありようで世界の中に置かれている。秩序の側から見るなら、範疇化を拒むその「ばらばら性」は、秩序の外に排除せざるを得ない特性である。「べとべと」が、その不定形性と不断の流動性で忌避の対象であったように、「ばらばら」もその不統一性と蠢動性で、秩序から忌避されることになる。

ところが、子どもにとって非統一であることは、断片化を意味するわけではない。というのも、断片あるいは寸断というのは、全体あるいは統一が失われた状態を意味するわけだが、そもそも子どもにとっては、全体あるいは統一として世界は捉えられることはないからである。子どもにとって、「現在」は、容易に過去や未来と融合する時間なのであり、時間の破片として「現在」のみを摘出する必要はない。このような、子どもによる融合的、流動的な時間の把握は、空間の把握にも滲出していくだろう。全体性、および統一性に基づく意味を視野に収めていない子どもたちにとっては、全体的でないもの、統一的でないもの、いわば「断片」として世界を捉える必要がないからである（本田 1982：54）。

非統一的な在り方をする子どもへのアプローチとして、本田は「感じられるもの」を手がかりとして、「マージナルな領野」における子どものありようを探ろうとしている（本田 1982：21）。つまり、不可視の〈深層〉へと沈潜しようと試みるのではなく、表層における微細な表徴に対する感受性を大切にしようとする姿勢である。ただ、表層のみを見ようとするアプローチではなく、子どもを「能う限り丸ごとの全体として」受け止めるための試みである（本田 1982：17）。

２．子どもの現れとしての「べとべと」「どろどろ」

子どもの脱秩序性・反体系性の現れを、本田は子どもの「べとべと」「どろどろ」への執着に見出そうとする。本田のみるところ、「べとべと」「どろどろ」というほかないような、世界の有する「混沌・融即・共存」の側面に親和的なのが子どもなのである（本田 1980：121）。子どもが泥を「こねる」ことによって「べとべと」に惑溺しようとしているとき、その行為は必ずしも子どもの意思によって導かれているわけではない。むしろ、泥が、子どもにその行為をするように仕向ける。「大地が適度な水分を含んで潤うとき、そのアモルファスな性情は、子どもたちに「こねる」ことを要求する」（本田 1980：116）。

「べとべと」「どろどろ」は、「明瞭、堅固、真物、永続性」などのような、生活世界における価値に対立す

る、いわば反価値であることによって、秩序・体系への侵犯性を顕わにする（本田 1982：69）。例えば、泥・砂で遊ぶ子どもはその具体的な現れであろう。砂遊びにおいて、「砂と水は子どもを野生の生きものへと結びつける」（本田 1982：25）。砂を「こねることはフォルムの破壊」である。子どもたちは「こねにこねる行為を通じて、あらゆる形式、角張ったもののすべてをその指の間で壊しつくす」。しかし、こねることは単なる破壊に留まらないデュナミスをはらむ。子どもたちは「ひたすら、全きなめらかさ、異質のものの均衡と調和を目指して、休みなく手を動かし続ける」（本田 1982：27）。ユング（1976）に触発された本田は、ここには、「化学の結婚」という対立の結合を目指した錬金術との相同性があると指摘する。「子どもたちが追い求める不滅の統一物は、一塊の泥という物質に託されて、一瞬一瞬その完成度を高めていく」（本田 1982：27）。

それと同時に、対象としての泥への統一は、内面における均衡をも生じさせる。「こね続けることで、彼らの中の怒りやいらだち、あるいは対立や攻撃などという、あらゆるとげとげしい感情が和んできて、穏やかな粘り強さに支配される」（本田 1982：27）。つまり、泥を「こねる」という動作は、単なる行為であることを超えて、内面との対峙でもある。このことに気づいていたユング派臨床心理学における箱庭療法では、砂が使用される。「砂が無意識を引き出し、それに形を与えてくれる媒体であるなら、それをまさぐる子どもたちは、手指を楽しませる泥の感触を追いつつ、自身の「内なる世界」と対面する機会を持つだろう」（本田 1982：28）。つまり、泥や砂との対峙は、内面との対峙なのであり、泥遊びには内面世界が投射されると同時に、泥遊びによって内面世界は変容していく。その変容は、統一への過程である。「泥とは、バシュラールの言を借りるまでもなく、砂と水の結婚」なのであり、「子どもたちのこねる手指は、まさしく、その結婚の媒介者なのだ」（本田 1980：117）。「こねることは、お互いを隔てる垣根を破壊し、あらゆるものを分かち難く一体とする」（本田 1980：118）という統合的・融合的行為なのである。そこで実現されようとしていることは、そもそもすべてが分割不能で渾然と一体化している、まさにウロボロス的連続なのであり、その渾然としたカオスは、新たな創造へのデュナミスとして生成する。連続性への遡求としての「こねる」ことは、「不断の生成」に他ならないのである。

要するに、「べとべと」への志向は、単に秩序・体系の顛倒・破壊へのタナトスの発露であるわけではない。本田によれば、泥で遊ぶ子どもたちは両義的である。「泥で遊ぶ子どもらの姿に、ある時は創造主の聖性を見、ある時は未だ文明に組みこまれざる野生の発現を見る」（本田 1982：29）。つまり、「べとべと」として生きる子どもは、現生の秩序の壊乱にたずさわると同時に、新規な創造への試行を繰り返しているのだ。既成の秩序の壊乱と、世界の更新・創始は、共なる行為なのである。泥の「可塑性、流動性」は、「子どもらを「はじまりの日の創造」へと導くのだが、また、その「可塑性」は、「無形態＝分類不能＝混沌」と同義でもあって、秩序世界に対する侵犯性を持ちかねない」（本田 1982：29）。

「分節化以前の原初性」に生きる子どもにおいて、世界は「分類とも範疇化とも、そして整合とも無縁に、ひたすら流動的に、どこにでも入りこみ、ものとものを混ぜ合わせ、あらゆるものを包みこんで、安らかに自足し得る」ような「混沌」にほかならない。子どもが「混沌」に侵し尽くされるとき、当然のことながら、「秩序はその輪郭を曖昧にされる」（本田 1982：43）。

そもそも、大人にとって、「既知」を境界付け、確定するためには、「未知」との邂逅が必要となる。「未知の訪れにおいて、人は、既知の己れらを発見し、「われわれ」という塊を出現させる」（本田 1991：249）。つまり、「未知の出現における、既知の制度化」（本田 1991：253）こそが、文化システムの確立、集団的アイデンティティの成立にとっての必須の条件である。本田によれば、時代の転換することによって「子ども」が発見されたのではなく、逆に「子ども」の発見によって、時代の転換が促進される。外部を取り込んだとき、システムは自ずから再編成を余儀なくされるからである（本田 1991：284）。本田によれば、「子どもの世紀」と

いわれる20世紀は、「内に「永遠の子ども」をかかえ込むことなしには、人と文化は活力を失い、やがては枯渇せざるを得ないことに気づいた時代」であった（本田 1982：132）。

ただ、システムにとっての「未知」は、「未知」であり続け、「既知」とは異質なるものとして刻印づけられ続ける運命にある。「未知」を、「既知」の外部へと放逐することによってのみ、システムは動的に成立しうるからである。「システムは、第三項を排除し、二項対立関係のシリーズを閉域のなかで確立することで自立する。二項対立の連鎖のなかで、排除される第三項は隠蔽されてしまうが、実はこの第三項こそ二項対立関係を可能にする」（本田 1991：253）。ここでいわれる「既知」となることを拒むものとしての「未知」、「既知」の初発の成立を可能にする母胎としての「未知」を、本田は子どもの現れの中に見て取ろうとするのである。つまり、排除される「始原のカオス」としての「子ども」に対するアプローチを試みるのである（本田 1991：254）。子どもたちが遊び続けてきた遊びには、人の生き方にかかわる根源的な経験が凝縮されている。「始原」における「未知」には、子どもの在り方の中に人類史の「原史」を読み取ろうとするアプローチによってこそ接近しうるだろう。原史をになう存在、原初的存在として、本田は子どもを見ようとする。「幼児という原初の存在は、その素朴に見える生活行為の中に、人の成長にかかわる根源的な課題を、縮図的に表現して見せてくれる」（本田 1980：130）からである。

３．挑発性としての〈運動〉

本田は、子どもの存在、あるいは子どもにとっての世界把握を、一貫して動的なもの、流動的なものとして描き出そうとしている。「幼い人たちにとって、「動くもの」は生命あるものであるから、独楽を回し、風車を舞わせることは、無生物に生命を与える営みに等しい」（本田 1980：85）。「動くもの」が生命の現れとして子どもに受け止められるとき、子どもの内面においては、子どもの生命が蠢動し、奔騰する。「独楽にせよ、風車にせよ、激しく回転する物体を見つめるとき、人は、己れの内なる生命の渦をそこに投射する傾向を持っている。その結果、凝視する人は、動きの渦に巻きこまれ、全身的な「眩暈」の状態に陥る」（本田 1980：86）。ここにおいても、外的な現れを内面との共振において捉えようとする本田の姿勢は一貫している。

子どもたちは、「風に躍る凧や紙飛行機の中に、自身の飛翔の夢を見る」（本田 1980：70）。つまり子どもたちは、飛翔するものに、たとえそれが無生物であったとしても、自らの飛翔のイメージを重ねる。この子どもの飛翔は、飛翔する物体によって触発されるという意味で、事後的なものである。「飛びたいという願望が先で、飛ぶものが作り出されるというのでなく、木の葉や凧という物体の動きに即応して、彼らの心も風に舞う」。ただ、飛翔する物体に、子どもの身心が「即応」することができるのは、子どもの内面に既に、自らを飛翔させるものとしての「風」がはらみ込まれているからである。「子どもたちの内奥に潜む「風」が、外なる風に共鳴して彼らを舞わせる」（本田 1980：70）のである。

「風」による飛翔は、不安定をもたらす。しかし、それこそが、子どもの心身を同時に活性化する。「子どもたちは、自身の知覚の安定に執着せず、意識のパニックを恐れない。彼らは、外と内で共鳴し合う回転のエネルギーに己れを委ね、日常的な意識や理性の柵を、すべて遠心力にのせて宇宙の四方に放射する。そして、存在自体がカオス状に漂うようなありようにおいて、陶然と酔い痴れることが可能なのだ」（本田 1980：88）。

動き続けることは、円環的運動においてこそ可能になるだろう。それは、渦を描くような運動である。本田は言う。「渦巻きの内側に入りこむことは、閉じられた他界へ足をふみ入れることと等価であって、死の脅威と重なり合う。しかし、同時にそれは、無限の続行の体験であるから、不死性のイメージを喚起するだろう。そして、反転、あるいは曲折による方向転換は、新たな生への帰還を意味することになる」（本田 1980：94f.）。

運動の円環的反覆は、時間の円環的反覆、そこにおいて生成する生命の円環的反覆のイメージと重なり合っていく。本田によれば、エリアーデは「循環のイメージの中に、「祖型の反覆」と「時の再生」を見た」という（本田 1980：104）。生成と消滅の反覆は、世界の絶え間ない「更新」として生起しているという。「子どもの歩みは、存在と時間との絶えざる更新であり、彼らは、一瞬一瞬を新しい「いま」に歩んでいる。それらは、まさしく、不断にくり返される「死と再生」の過程である」（本田 1980：105）。「死と再生」の反覆こそは、世界と、世界の中に生きる子ども自身の賦活に他ならない。「循環する時間のイメージ」（本田 1983：68）においてこそ、そのような果てしない生の更新が可能となるのである。そのような円環的・反覆的な時間の把握は、直線的・一過的な時間認識と対立するものである。つまり、子どもの時間は「均質恒常に直進することはない」（本田 1980：105）。子どもの時間においては、「いま」を原点とした、未来／過去という単純な対立は存在しないのであり、多元的な「いま」が重層的に共存しあっているといったほうがよいのかもしれない。子どもたちの時間は、「非連続に見えるいま」であり、それぞれの「いま」は互いに独立しているのである（本田 1982：58）。子どもの時間は「点」ではない。むしろ、それは層的な時間といったほうがよいかもしれない。子どもにとっての時間は、静止させられた「点としての時間」ではなく、異質な時間の共存する「出来事としてのいま」であり、「複合的な時間」（本田 1982：62）なのである。本田によれば、子どもが生きる時間は、連続的かつ直線的であるかのように観念される大人にとっての時間とは異質である。子どもは、「時間の間隙を軽々と飛び越える存在」（本田 1980：75）である。子どもたちの現在は、流れゆく時間軸上の一点なのではない。子どもたちの「いま」は、「滞在」することのできる現在であるともいわれる（本田 1982：57）。つまり、子どもたちの「いま」は瞬間なのではなく、持続なのである。「長さと厚みを持った分割不可能のかたまり」としての「いま」（本田 1982：57）を、子どもたちは生きているのである。

４．子どもの遊び世界の二重性・世界認識の両義性

子どもの非定型性・運動性は、子どもの遊びにおいて顕わとなる。子どもの「遊戯空間」は、日常的な生活空間とは異質な場として成立する。「遊戯空間」は、子どもの意識を契機とする。「「遊戯意識」が確立したとき、彼らは、「遊戯」という虚構の生を展開するために、日常空間を切り裂き、自身の周囲に「遊戯空間」を出現させる」（本田 1980：195）。子どもによる「遊戯空間」の創出は、世界の変貌として実現する。遊戯的世界は、日常的世界が反転することによって生起する。子どもは「自分の周囲に呪術の輪を張りめぐらし、その中に足をふみ入れることにより、一瞬のうちに、世界を変貌させる。彼らが「ある行為」におもしろさを見いだしたとき、世界は反転して、ありふれた日常世界に魔法がかけられ、現実的、日常的時空間は、「遊戯的、非日常的時空間」に様変りし、世界は、彼らの色で彩られる。子どもたちが呼吸するのは、まぎれもなく、私どもと同じこの現実の空気であり、彼らが立っているのは、私どもと同じこの地球の表面なのだが、それでいて、遊ぶ子どもは、疑いもなく、「別世界」の存在者なのだ」（本田 1980：10）。非日常的空間としての「遊戯空間」は、日常的空間の「反転」によって生起している以上、日常的空間から完全に剥離してしまうことはない。その証拠に、子どもたちは、日常的生活行為を「遊んでしまう」。「「遊び」とは、合目的的な生存活動に直結せず、そのこと自体の魅力において遂行される活動であるが、子どもとは、食べる、着る、などの活動をすら、「遊んでしまう」存在」である（本田 1980：10）。子どもたちは、現実性としての日常的空間に生きながら、同時に、そこに非日常的空間としての意味連関を構築してしまうのだ。子どもたちは「「いま」立っている「遊戯世界」が、同時に、現実の大地であり、彼らの住居を支え、乗りものを走らせる地表であることを知っている」（本田 1980：10f.）。つまり、子どもたちは、「遊戯世界」が、現実世界を基盤として成り立っていることに自覚的なのである。つまり、子どもは、現実世界なしでは遊戯世界が成立しえないというパラドッ

クスを知っている。子どもにとっての遊戯世界は、「それぞれに「虚でありつつ、同時に、実である」のだ。遊ぶ子どもの、世界を見る視力は、常に二重であり、世界を図る目盛りも一本ではない。彼らが生きるのは、「現実」と「非現実」が共存し、「昼」と「夜」が同居する世界である」（本田 1980：11）。

子どもが、このような〈現実／非現実〉という二重性を生きることができるのは、その二重性を、自身の「肉体」という媒体によって相互媒介させているからである。子どもたちは、「現実も非現実も、理性も情動も、あるいは、時間も空間も一体化させて、自身の肉体に凝縮する」（本田 1980：12）。それゆえ、「肉体」に投影される世界像は、つねに二重化されている。「子どもらに固有の世界と向き合おうとするとき、私どもの眼に、「見える姿」として鮮やかに映じるのは、この、世界に対する「同時的二重把握」であり、それの「肉体による顕現」ではないだろうか」（本田 1980：12）。子どもが「肉体」の相において実現している世界への「同時的二重把握」は、子どもの世界への姿勢が、包摂的なものであることを示している。「子どもらの前に、世界は、正と負、光と影、あるいは昼と夜、などの共存において立ち現われるものであり、彼らは、その影の部分をも排除することなく、それらのすべてと向き合っているのである」（本田 1980：40f.）。この「同時的二重把握」を可能にするものを、本田は「二重の視力」（本田 1980：13）とも呼んでいる。「子どもたちは、二重の視力で世界を捉え、二重の相にその生を展開する。彼らが生きるのは、「現実」と「非現実」が同居し、「昼」と「夜」が共存する世界である」（本田 1982：62）。

子どもの世界把握には、両極を分化させ、そのうちのどちらかを否定し去ろうとするような志向は存在していない。「子どもたちは、現実を否定する行為を、現実のレベルにおいて展開しようとはしない。彼らは、遊び、あるいは物語世界という虚構の次元で、それを行なおうとするちえを身につけている」（本田 1980：43）。子どもによる両義的、あるいは多義的な世界把握は、そのレベルを「虚構」におくことによって可能になっているのである。

子どもたちの肉体とは、世界理解のための媒体であり、同時に、その理解の表徴でもある。ただ、子どもたちが表象するのは、可視的な世界そのものではなく、世界の全体を象徴的に構造化したものの要素である。「子どもたちの肉体があらわにするのは、彼らの世界像であり、世界把握なのだ。彼らが写し取るのは、見える姿の世界ではなく、象徴としての世界である。したがって、現実生活と「ごっこ遊び」が対応するとしても、それは、生活のありようそのものに関してではなく、象徴論的構造における対応である」（本田 1980：40）。つまり、子どもの遊びを読み取ろうとするとき、その表層における現れだけに焦点化しても、その意味の全体的把握は不可能である。子どもの遊びの現れは、深層におけるアーキタイプ（元型）の表現でもあるというように、表層／深層が重層化したものとして見られなければならない。つまり、子どもの遊びは、世界の可視的側面の単なる模倣なのではない。「「ごっこ遊び」を遊ぶ子どもたちは、モデルの動きに近づこうと意図するのではなく、それを借りて、深層で機会を待つ元型イメージを表出しようとするのだし、その機会を通して、より自由に「他者」を生きようと試みる」（本田 1986：104）。つまり、子どもは深層における原型を「遊び」として表象することによって、元型的他者をも同時に、重層的に生きているわけなのである。

そのような、子どもの現れの重層性に着目しようとするとき、子どもの可視的な相を、あくまで「象徴」として見て取ろうとするパースペクティブが必要となる。子どもが、世界を「二重の視力」によって、同時に重層的につかみ取っているとしたならば、子どもの世界把握に肉薄しようとする大人の子どもへのアプローチも、二重化されなければならないだろう。つまり、子どもの「現われ」は、二重に読み解かれなければならない。「一つは、視覚に与えられた「見えるままの姿」であり、いま一つは、いわゆる「言語による解釈」である」（本田 1980：13）。つまり、「見えるままの姿」のみをあるがままに捉えようとするだけでなく、その意味を、深層へと遡行しながら「言語」を介して解釈的に捉えようとする試みが必要となる。この二つのアプロー

チは、同時に遂行されなければならないのである。

おわりに：〈子どものコスモロジー〉の思想史的意義

本田において、〈子ども〉という存在は、反体系性・非統一性としての「異文化」を表象しているのであり、それが「異文化」である所以は、体系性・統一性を構成原理とする〈大人の文化〉との著しい異質性にあるとされた。そして、「異文化としての子ども」は、現実の幼児においてのみならず、大人の内奥にも潜む深層的な潜勢力として見出される批判原理なのであった。

本田が、子どもの存在の態様を、〈子どもの文化〉と呼び、〈大人の文化〉とは異質な文化的主体として子どもを位置づけなおそうとすることは、子どもと大人の差異性に着目することで、大人の側の論理、世界観に子どもを同質化すること、同化することを自制しようとする態度の表明であった。〈大人の文化〉が、私たち近代的主体が内面化しているエートスであるとしたら、それに回収されない逸脱としての〈子ども〉は、近代的主体への問いなおしの契機となるはずである。

その一方で、中村雄二郎が指摘するように、コスモロジーというパースペクティブは、普遍主義的で均質な時空間把握に対するアンチテーゼとして提出されてきた（中村 1992）。そのことは、普遍主義的な世界像を前提としてきた近代科学とそれを支える啓蒙主義的な近代思想、それに依拠する近代的な生活規範に対するラディカルな懐疑として、コスモロジーが提起され、そして受容されてきたことを意味する。〈子ども〉と〈コスモロジー〉の接合は、近代への問いなおしという思想的課題を、〈子ども〉という具体性・身体性という現れの位相において達成しようとした試みであったと評価できるであろう。

附記

本稿は、2022年度科研費若手研究（「1989年幼稚園教育要領を中心とした平成期子ども中心主義保育理念の形成過程の解明」）の助成を受けた研究成果の一部である。なお、本稿の一部は、日本教育学会第81回大会（2022年８月24日、オンライン開催）において口頭発表されている。

文献

浅岡靖央（1991）「〈子ども〉論の誕生と〈子ども〉という物語の崩壊」『日本児童文学』37、(11)。
石井直人（1986）「異化：本田和子の仕事のことなど」『日本児童文学』32、(9)。
鵜野祐介（1998）「「子どものコスモロジー」の理論」『子ども社会研究』４。
エリアーデ（1969）『聖と俗：宗教的なるものの本質について』風間敏夫訳、法政大学出版局。
小谷敏編（2003）『子ども論を読む』世界思想社。
小浜逸郎（1987）『方法としての子ども』大和書房。
首藤美香子（2011）「子ども学試論（3）：1980年代における近代知の変革と子ども論の浮上」『地域と子ども学』４。
高橋靖幸（2010）「子どもを「異文化」として問う視点：「異文化としての子ども」から「子どものエスノメソドロジー」へ」『立教大学教育学科研究年報』53。
中村雄二郎（1992）『臨床の知とは何か』岩波書店。
バシュラール（1968）『空と夢：運動の想像力に関する試論』宇佐見英治訳、法政大学出版局。
バシュラール（2002）『空間の詩学』岩村行雄訳、筑摩書房。
藤本浩之輔編（1996）『子どものコスモロジー：教育人類学と子ども文化』人文書院。

本田和子（1980）『子どもたちのいる宇宙』三省堂。
本田和子（1982）『異文化としての子ども』紀伊國屋書店。
本田和子（1983）『子どもの領野から』人文書院。
本田和子（1986）「「ごっこ遊び」考：遊戯世界に「他者」を生きる」『児童心理』40、(3)。
本田和子（1987）『子どもという主題』大和書房。
本田和子（1989）『フィクションとしての子ども』新曜社。
本田和子（1991）「〈原史〉としての子ども」加藤尚武ほか『子ども』（現代哲学の冒険２）、岩波書店。
本田和子（1995）「子どもの「遊び」を考える」『児童心理』49、(13)。
本田和子（1999）『変貌する子ども世界：子どもパワーの光と影』中央公論新社。
本田和子（2000）『子ども100年のエポック：「児童の世紀」から「子どもの権利条約」まで』フレーベル館。
本田和子（2007）『子どもが忌避される時代：なぜ子どもは生まれにくくなったのか』新曜社。
本田和子編著（1998）『ものと子どもの文化史』勁草書房。
山口昌男（1975）『文化と両義性』岩波書店。
山口昌男ほか（1984）『挑発する子どもたち』駸々堂出版。
ユング（1976）『心理学と錬金術』（１・２）、池田紘一・鎌田道生訳、人文書院。

Masuko Honda's cosmology of children

Naoya Yoshida
Osaka Metropolitan University

Abstract

This paper focuses on Masuko Honda's theory of children, which has been developed since the 1980s, and attempts to clarify its characteristics as a cosmology. Focusing on the 'provocativeness' of children, Honda focuses on the 'anti-cosmological' character of children's cosmology. According to Honda, children's behaviours as intermediaries, boundaries and mediators are characterised by amorphousness and directionlessness. Their 'invasiveness' is a challenge to the cultural system as a stable order and reveals the arbitrariness and rigidity of the order on which adults rely. According to Honda, children's provocativeness appears in their fluidity and transformativeness. Both fluidity and transformativity are the opposite of cultural systematics. Children 'provoke' the existing culture. As a manifestation of anti-systematics and disunity, children are characterised by their fragmentation, instantaneity and disconnectedness. The fragmented nature of the child manifests itself through behaviours that nullify coherent meaning. The continuity of time, which supports the continuity of meaning, is also nullified. The child represents a 'different culture', one that is anti-systematic and non-unified.

Key Words: children as a different culture, cultural anthropological approach to children, developmental criticism